

1 岩手県滝沢市 滝沢市役所若者活躍推進室

「若い世代の行政参加の取り組みと評価について」

・岩手県立大学と私立盛岡大学の2大学が立地し、盛岡市とも隣接していることから、学生の「学びの場」「生活の場」「活動の場」「仕事の間」としての環境が整っている事が特徴的だった。一方で、大学生を学生時代の一時的な居住者として捉えるのではなく、地域で抱える課題への担い手や知恵を寄せる主体として学生を位置付けるとともに、若者の自己実現の間として役場の業務を共有するなど、学生が社会へ踏み出すための助走期間として、役場が重要な一翼を担っていることがうかがえた。また、日常的に SNS に触れている世代が情報発信を行うことによって、思い切った発信での魅力発信が展開され、行政も学生と企業を繋ぐ役割を果たすなど産官学の相乗効果が体現された取り組みが印象的だった。

箕輪町でも近隣に信州大学農学部や上伊那農業高校といった魅力的な学校が存在し、志を持った学生が学んでいることを再認識し、農林業が抱える課題に対しても学生たちと共に知恵を絞るなど、産官学連携の取り組みを模索すべきと感じた。

2 岩手県滝沢市 ビッグルーフ滝沢

「大ホール、会議室、図書館、観光案内、産直、レストランなどの滝沢市交流拠点複合施設」

・滝沢市役所の向かいという立地を生かし、情報交換や観光、学びや文化の発信など、多岐にわたる分野の拠点となる複合施設だった。図書館やキッズスペースが設けられていることから、子どもから学生・子育て世代の利用はもちろん、茶道教室帰りの着物姿の年配者が混在するなど、多世代に活用されていることも一目瞭然だった。ビッグルーフの愛称の通り、1階にも2階にも屋根が張り出した空間が設けられ、イベントや日常使いでも利便性の高さを感じた。

みのわベースがいくつも入るような規模ではあったが、『市民の交流拠点』であると同時に『情報の発信基地』という側面もおおいに発揮されており、学ぶところが多い施設だった。

3 岩手県紫波郡紫波町 オガール企画合同会社

「オガール循環型まちづくり・環境コース」

・利用目的のはっきりしなかった広大な町有地を活用し、民間主導で役場庁舎を中心にしたまちづくりを1から計画し、地域資源循環型の行政を PFI 方式で実現した画期的な事例として視察した。役場庁舎の建材を地場産木材に限定するところから、隣接する住宅にも地場産木材の活用を条件とするなど、徹底した循環のシステムが貫かれていた。また、役場や周辺施設、隣接住宅団地の暖房の熱源を併設するチップボイラーから供給しており、使用するエネルギーも地産地消されていた。あわせて、関連施設の中にはスーパーが併設され、地場産の野菜・魚・肉など産直の役割も備えており、産業や雇用といった面でも循環型経済の哲学が感じられた。紫波町が資源としている主体は木材であり、木材資源の利活用という課題で、箕輪町でも参考にすべき視点に溢れていた。

一方で、役場周辺は賑わうものの、周辺部の人口減は著しく、学校の統廃合も急速に進むなど、バランスのとれた地域の発展という点で疑問が残った。どれだけ町が発展しても地域間格差が拡大することは避けなければならない。民間企業が主導することによって生じる行政の不均衡をどのように図っていくのか、今後の紫波町政にも注目してみたい。

4 岩手県紫波郡紫波町 紫波町役場

「NFT を活用したデジタル戦略について」

・地方が直面する少子高齢化や過疎化といった課題を、デジタルサービスによって解決を模索する取り組みについて、NFT を活用したデジタル戦略の一端を学んだ。紫波町として民間業者から提案のあった Web3 構想にいち早く共鳴し、デジタル分野から地域活性化や住民サービスの向上への模索が始まっている。地方創生の一つの手法として NFT に取り組んでいるが、具体的な成功事例はまだない。議会や町民がどこまで理解・賛同しているかは不明だが、公民連携で新しい分野に取り組むことへの理解は、オガールプロジェクトの先行事例が素地にあると受け止めている。令和 4 年からの取り組みで、具体的な施策は少ないが、今後は暗号資産の価値の説明や理解の醸成、施策のターゲット層を絞ったサービスの提供へと段階を踏んでいくとのこと。

デジタル戦略の手法として NFT を活用するかどうかは別として、『デジタル分野の取り組みを推進するうえで大事なのはアナログの取り組みだ』という言葉が印象的だった。紫波町では地域の会合などに出向き、顔と顔を合わせる場でデジタルのすそ野を広げているとのこと。デジタルだからと言って、なんでも Web 上で解決するものではない、との言葉は非常に重みがあった。

5 岩手盛岡市 木伏緑地

「公設の都市公園。公民連携・民間主導による管理」

・盛岡市が取り組むパーク PFI について、3 事例を紹介いただいた。中でも、盛岡駅から徒歩 5 分に立地する木伏緑地はプロポーザルによる入札で、20 年契約の公園の管理とともに、市に公園使用料が納入される。市としては公園の管理と併せて、公衆トイレの整備という目的も達成でき、メリットしかない事業と感じた。また、中央公園での PFI では保育園の運用という目的を設定しており、あくまで行政課題の手段として PFI を利用していることが伺えた。木伏緑地のランプや舟屋など、地域の歴史や文化も取り入れた運用が特に印象的だった。

全体を通じて

・『公民連携（官民連携）』をテーマに、岩手県紫波町を中心に視察先を選定した。滝沢市でも盛岡市でも公民連携の機運は紫波町のオガールプロジェクトであると認識しており、多様な事例を視察することができた。行政だけでは解決できない分野や事案があって取り組む公民連携も、未来を見据えて戦略的に民間の力を活用する公民連携もあることを痛感した。公民連携を推進するカギは『地域資源の活用』であり、モノ、ヒト、ナリワイの循環を哲学をもって進めることが肝要だと受け止めた。モノの価値、ヒトの価値、ナリワイの価値に気づき、焦点を当て、行政は黒子に徹する。そんな行政文化が根付くと、行政が本来やるべきサービスに傾注できるのではないだろうか。

いずれにしても、切羽詰まって”委託”という形で民間に頼るのではなく、直面した課題に如何に前向きな姿勢で公民連会事業を展開できるか、が成否を左右するのではないかと感じた。

言うは易し行は難し。しかし、やってみなければ後手になるのは必至。下心を捨て、若者の社会参加を支援するという視点で、まずは信大生などとの交流からはじめてはどうだろうか…